

論文の和文要旨

論文題目 社会的敵対性と国家
 ニコス・プーランザスにおける政治的なものの位相論

氏名 柏崎 正憲

本稿は、資本主義国家としての近代国家をマルクス主義の視点から研究した政治理論家、ニコス・プーランザスの理論、方法、および思想の包括的研究である。1970年代以来、福祉国家政策からの衰退、新自由主義政策の出現、いわゆるグローバル化のインパクトなどが、国家および政治をめぐる既存の通念を大きく揺さぶってきた——国民国家は衰退しつつあるのか、国家の上位に、あるいはそれにかわって政治秩序が構築されつつあるのか、等々。しかしながら、こうした問題が提起されはじめてから二、三十年たつにもかかわらず、国家のいくつかの側面はまったく変化していないように見える。政治秩序の何が変化し何が不変であるのかを識別するためには、そもそも国家とはいかなる種別の特徴をもった政治秩序なのかについての妥当な理論的認識が必要である。1960年代から1970年代にかけてプーランザスが練りあげた国家理論からは、今日でも学びうるところが大きい。

本稿は全三部から構成される。第1部(第1-2章)は、プーランザスが国家を研究する方法に焦点を当てている。先行研究とは異なって本稿は、プーランザスの方法がサルトルとアルチュセールの独創的な結合に由来することを強調している。存在と意識、実践と理論、経済的なものと政治的なものにかんする建築的・地形学的な二元論を斥けている点で、サルトルとアルチュセールには共通性が見出されうる。これらの潜在的に共通する方法が、プーランザスが国家を資本主義的な支配関係の全体性のなかで把握するための手がかりとなった。第2部(第3-5章)では、プーランザス国家理論の核心を解明する。かれ自身の研究方法は、位相論的アプローチとして特徴づけうる。それが意味するのは、経済的なものと政治的なものの現実的分離を認識しながらも、それをたがいに外的なふたつの実体あるいは場としてではなく、社会的過程をつうじてたがいに内化していく二種類の関係性として把握するということである。そのような捉えかたにもとづいて、プーランザスは国家を社会関係の媒介された形態として、階級間の勢力関

係の凝縮された表現として理解した。資本主義社会においては公的・政治的なものから分離された私的・経済的関係そのものが支配の領域をなしているが、この領域における階級的敵対性を国家は解消するのではなく、むしろ政治的なものへと置き換える。このような意味で、国家は社会の調停者ではなく、その制度的反映なのである。第3部(第6-7章)では、プーランザスが世を去った1979年以降における国家の変容を分析する。プーランザスを引き継ぎつつ、世界規模の資本蓄積システムにおける支配的な資本分派の相互依存および一体化という観点から、国家のトランスナショナル化の傾向を分析する。ただしその一方で、国際的な蓄積システムにおける中心からの周辺への支配という問題にかんするかれの限界も、補われねばならない。そのために本稿では、19世紀以降における国家間システムからの市場の分離および非公式帝国の出現という観点によって、プーランザス的アプローチの補完を試みている。

第1章(第1部)では、サルトルによるマルクスの実存主義的な読みかえが、プーランザスの国家研究に潜在的だが決定的な持続的方向性を与えたことを解明する。サルトルによればマルクスの方法は、基本的には唯物論的でありながらも、同時に実践としての思考の現実性をも認めているかぎり、「存在論的一元論」であった。サルトルはまた、マルクスの方法のなかに、行為が客観化され行為者の意図を離れた事物として現れる側面(外化)と、客観的世界が主体との動的な相互作用のなかで意味づけなおされる側面(内化)とが含まれていることを見出した。サルトルのアプローチに依拠しつつ、プーランザスは法規範の構造化を、法的構造が社会的現実の形式化(外化)を進めながら社会的現実により接近(内化)していく二重の過程として分析した。ここに、経済的土台と政治的上部構造の建築的二元論からのプーランザスの断絶を見出すことができる。

第2章では、実存主義的な法哲学からマルクス主義国家理論へのプーランザスの移行を跡づける。アルチュセールによるマルクス主義的観点からの経済決定論の批判が、この移行の媒介となった。ただし、プーランザスがアルチュセールから学んだ方法が構造主義の認識論的方法とは無関係であることを強調するために、本稿では、アルチュセール自身の問題設定を構造主義のそれからあらかじめ区別している。社会的矛盾または階級的敵対性が国家によって調停されるのではなく国家そのものに凝縮されているというアルチュセールの洞察から、プーランザスは資本主義国家の研究をはじめている。そのとき、かれは明示的には実存主義の語彙を払拭しているが、しかし方法の次元においては、サルトルの二元論批判をアルチュセールによる経済決定論批判と結合させている。

第3章(第2部)で考察するのは、プーランザス国家理論の基本的内容と、ファシズムなどの具体的な国家体制分析へのその適用である。資本主義社会が政治的支配からの経済的支配の分離という条件とともに出現することを解明したのはマルクスであったが、プーランザスはこの分離にもとづく政治的支配に特有の形態を問う。プーランザスによれば、国家は支配階級を組織化しつつ階級支配を構造化している。つまり、一方における競いあう支配諸階級における共通利害の調整過程と、他方における私的個人へと解体された被支配諸階級への共通利害の押しつけの過程とが、人民・国民の統一性を代表する公的国家という形態をとるのである。この組織化＝構造化の過程に着目することによって、プーランザスはファシズム体制や軍事独裁体制が資本主義国家の例外的形態であることを解明する。かれによれば例外体制は、代議制民主主義の本質的な欠如というよりも、支配階級の組織化が国家装置の分権構造によってではなく、軍や政党などの突出した役割をつうじて達成されているような体制を指す。

第4章では、経済的支配にかんするプーランザスの考察に焦点を当てる。資本蓄積の領域における支配関係は、精神労働とマニュアル労働の敵対的対立にもとづいている。労働者たちを「手の労働」として使役し統制する「頭の労働」は、現代の生産過程においては、さまざまな賃金取得者によって代行されて

いる。この担い手たちをプーランザスは、マニュアル労働者としての労働者階級からは区別される「新しいプチ・ブルジョワジー」という独自の階級として定義している。この新たな階級にかんする定式は誤りを含んでいるものの、かれの洞察は、生産過程それ自体における支配関係を特徴づけている点で有益である。

第5章で見るのは、1970年代における資本蓄積システムの国際的な危機という条件のなかで、プーランザスが国家をどのように問いなおしたかである。かれはこの危機のなかに、支配的な資本分派の国際的な統合または相互依存の傾向を見出す。この傾向は国民国家を掘り崩していくというよりも、むしろ国民国家の支えによって発展している。この危機は、それまで社会国家政策によって維持されていた階級妥協の形態を危機に陥れたが、その一方で、この危機にどのように介入すべきかをめぐる左翼の戦略にも危機をもたらした。この二重の危機が国家をめぐる理論的混乱をともなっていることを見出したプーランザスは、その解決のために、資本主義国家の物質性を明らかにしようとする。精神労働とマニュアル労働の分離を社会的規模で再生産する国家装置。囲い込まれ細分化された近代的空間と一元化され測定される近代的時間。国家に独占された正統な公的暴力。こうしたカテゴリーが、資本主義国家が帯びている物質性／具体性を示している。この物質化された支配関係そのものを問題としなければ、すなわち、たんに左翼が(合法的または非合法的に)奪取した国家権力によって社会を上から変革しようとするだけでは、支配関係の変革は実現しないだろう。それゆえにプーランザスは、国家活動としての政治をはみ出す政治的実践の可能性を探求する。

第6章(第3部)では、プーランザスのアプローチを引き継いでいる論者たちの仕事を参照しつつ、いわゆるグローバル化において国家が果たしている積極的役割を考察する。グローバル化理論の多くが依拠している、政府による統治から多様なアクターによるガヴァナンスへの転換というアプローチ—その変種としての「帝国」理論も含めて—を、本稿では斥けている。国家は社会政策から後退しながらも、トランスナショナル化した資本のために国内的諸条件を積極的に活用するかぎり、ナショナルな空間の統制力を失っていない。だがその一方で、国家の上位にグローバルな政治秩序が形成されるというよりも、国家そのものがインターナショナル化する。すなわち、トランスナショナル化した資本の利害調整のネットワークの結節点として国家は再編される。

第7章では、資本の国際的ネットワークの中心部による周辺の支配にかんするプーランザスの理論的考察の欠如を補うために、世界経済および国家間システムというカテゴリーを採用する。ただし、世界システム・アプローチは、金融や交易が政治権力と結びつくことで資本主義が生じるという誤った理解に依拠している。だが実際にはその逆に、政治と経済の分離をつうじて資本主義は歴史上に現れる。資本主義の世界的拡大の起点は、国家間システムからの世界市場の分離と、経済外的強制を公然と行使することなく経済的に支配する非公式帝国との出現に見出されねばならない。周辺部との関連では、国家間システムは当初から非公式の支配と公式の支配との矛盾につきまわっている。この矛盾は、資本のトランスナショナル化の局面においては、支配階級のトランスナショナルな組織化と、階級支配のいぜんとしてナショナルな構造化とのズレとして表現される。このズレを人間解放の実践へとつなげていくためには、移民労働者の社会的地位などに象徴されている、ナショナルな枠内における社会的紛争の場に集中された中心と周辺との分裂をのりこえる道が探求されねばならない。

国家研究としての本稿の貢献はつぎの点にある。国家を実体として考察させる方向に導く「国家とは何か」という問いを、「資本主義社会の政治秩序が国家という形態を帯びるのはいかにしてか」という問いへとシフトさせたこと。政治空間の建築的・地形学的な表象を斥け、位相論的アプローチへと置き換え

たこと。いわゆるグローバル化の進行にもかかわらず、なぜ国民国家形態が基本的には従来どおり維持されるのかを理論的に説明しえたこと。今後の課題はつぎのとおりである。トランスナショナル化した支配階級と階級支配のナショナルな枠組とのズレが今後帯びていくであろう諸傾向の分析。階級的な支配関係と、ジェンダー的、人種的、民族的などほかの社会的差異にもとづく支配とが、国家という政治的形態においていかに結合しているかの研究。